

宇都宮の志士 菊池教中

栃木県立博物館主任研究員 飯塚 真史



菊池教中画像 藤田泰泉筆（栃木県立博物館蔵）

嘉永6（1853）年、アメリカのペリー提督が艦隊を率いて日本へやってくる、幕府は200年以上守ってきた鎖国政策を転換し、開国に踏み切りました。対外政策の大きな転換による混乱は、幕府の権威を失墜させ、朝廷や諸藩の政治的な発言力を増大させました。さらに外国貿易による物価上昇などにより、武士だけでなく庶民の間にも幕政に対する不信感が広がりました。宇都宮から江戸に出店して二代で豪商となった父の跡を継ぎ二代目佐野屋孝兵衛を名乗った菊池教中（1826～1862）もその一人でした。

跡を継いで間もなく、安政二（1855）年、安政の大地震による江戸の大火で店が焼失し、大損害を受けました。教中は経営改革をおこなう一方で、拠点を江戸から佐野屋創業の地宇都宮へ移すことを

決意しました。そして、志士としての活動も始めました。

江戸時代後期の宇都宮では、文人と呼ばれた知識人たちの寄り合いの場が形成されていました。彼らは、武士・町人・僧侶などといった身分を越えて、詩歌・書画などを通じて交流しました。教中は、商人でありながらもそのような文化的サロンを主催したり、ほかのサロンに出入りしたりしました。教中が編集刊行した漢詩集『澹如詩稿』によると、安政4（1857）年5月20日に「清巖精舎」（清巖寺）で観専寺住職稲木黙雷主催の書画展覧会が催されたとの記録があります。その際、教中ら文人たちは数十幅に及ぶ作品を観覧し、品評するとも互いに酒を酌み交わして感動を共有したといえます。こうした交流を通じて、特に縣六石や戸田香園、藤田素堂といった宇都宮藩士たちとの親交を深め、宇都宮藩との関わりを

強めていったと考えられます。そして、それらの人脈にも助けられ、教中は桑島・岡本新田を開発し、その功績により、宇都宮藩の士分（武士の身分）に列せられました。

教中は、宇都宮藩の儒学者だった義兄大橋訥庵とともに、幕政を批判し外国勢力の排除を図る尊王攘夷運動に奔走しました。桜田門外の変の後、老中・安藤信正は悪化していた朝幕関係（朝廷と幕府の関係）の改善と幕府の権威回復を目指して、公武合体政策を推進、その具体策として、孝明天皇の妹和宮を十四代將軍徳川家茂のもとに降嫁させます。安藤信正が和宮を強引に公武合体政策の犠牲にして降嫁させたと考え、憤慨した教中、訥庵ら宇都宮の尊攘派は、水戸の浪士と組んで安藤信正暗殺を企てました。文久2（1862）年1月15日、下野の医師・河野頭三と水戸の浪士ら六人は、ついに信正を襲撃し、負傷させました（坂下門外の変）。その後、教中はこの事件において志士たちを金銭的に支援するなども関わったとして、宇都宮の同志とともに捕らえられました。教中は、投獄され、出牢後まもなく35歳の若さで病死しました。

襲撃自体は失敗に終わったものの、安藤ら幕閣が更迭され、尊攘派への弾圧が緩和されるなど、坂下門外の変はその後の政局にも大きな影響を与えました。教中ら宇都宮と水戸の志士たちの尊王攘夷運動は幕末の初期において全国に先駆け、たどった一つだったといえます。

◎柏村祐司氏の「ふるさと歴史民俗散歩」は、2020年3月号に連載が終了しました。2020年4月号から栃木県立博物館人文部門の各担当者による新連載「うつのみや歴史紀行」がはじまりました。

●柏村祐司先生には長期間にわたる御執筆に心から感謝申し上げます